

マリアのシンテシラ

物語

前編

エリー

第1章：英雄伝とマリア誕生

ある民家の一室で、犬人間の女の子が、お母さんと一緒に本棚の前にいました。
女の子が聞きました。

「今日は何のお話？ マリアさま？」

「違うわよ。魔法が栄えるこの国のはじまりのお話よ」

「ええー」

「マリアさまもこのお話が好きなのよ」

「あとでマリアさまの話も読んでね」

「いいわよ」

「じゃあ聞く」

「じゃあおいで」

女の子は、お母さんの膝の上ののって、絵本を開きました。

* * *

むかしむかし、あるところにドクトール王国とニニーム共和国がありました。
ドクトール王国には犬人間が、ニニーム共和国には猫人間が住んでいました。

二つの国は品物を交換して仲良く暮らしていました。

あるときドクトール王国で「魔技（まぎ）」が発明されました。

ドクトール王国はお金持ちになりました。

すると突然、ニニーム共和国の悪い魔術師がドクトール王国のラビット城を乗っ取ってしまいました。

王さまと戦士たちは力を合わせて城を奪いかえしました。

悪い魔術師は殺され、再び平和になるはずでした。

しかし、ニニーム共和国の悪い人たちが、またドクトール王国を攻撃してきたのです。

やられては、やりかえすを繰り返し、99年が経ちました。

100年目にアモス・アラン王という英雄が現れました。

王になった時、1歳になるルーカス王子が平和に暮らせるように、話し合いを呼びかけました。

しかしニニーム共和国は呼びかけにこたえませんでした。

戦いを終わらせるためには勝つしかありません。

けれど猫人間たちは転送魔法を使って逃げてしまうので、なかなか勝負がつきませんでした。

ある日、13歳になる回復魔法の天才児イアン・ブーンをつれて、大賢者ランバート・ラブキンがアモス王にあいにきました。

大賢者ランバートの知恵と知識で、アモス王は戦いに勝つことができました。

けれど長い間争ってきた人々は簡単には仲直りできません。

弟のクリスにすべてを託して、アモス王は自分の命を捧げて平和を祈りました。

夫を愛する王妃もあとにつづきました。

仲間を裏切った大賢者ランバートも命を捧げました。

人々はやっと戦いをやめる決心がつきました。

「同じ尻尾のあるもの同士！」

それがアニマル連合の挨拶となりました。

人々が平和を祝ってお祭り騒ぎをしているころ、英雄の王の国で、一人の女の子が生まれました。

* * *

「ほら、純白の毛のかわいらしい女の子ですよ。瞳もお母さんとお父さんに似て黒いのかしら？」

そうって、助産婦さんがわたくしに生まれたばかりの赤ん坊を見せてくださいました。

窓の外では、"アニマル連合万歳！"の声が、聞こえておりました。

わたくしの家は、ドクトール王国の城下町の教会の隣にあります。夫は毛織物工場の経営者で、姓はマレットと申します。

忙しい夫は、ずっとわたくしに付き添うことはできませんでした。けれども、生まれた直後には駆けつけてくれました。

「わたしたちにそっくりだ。なんてかわいいんだろう。さあ、目を開けておくれ」

わたくしと夫は、赤ん坊の顔を見詰めました。すると赤ん坊の目が開きました。

娘の目を見たとき、わたくしは思わず悲鳴をあげてしまいました。なぜなら、左の目は赤く、右の目は金色だったからです。

あまりに驚いて、誰も口をききませんでした。そこへ、クック神父さまがいらっしゃいました。

「なんと珍しい目をしているのだろう。この子は神に選ばれた特別な子に違いない。聖母の名前をとってマリアと名付けようではありませんか」

そういうとマリアに神の祝福を与えてくださいました。

神に祝福された子。そんな子をどう育てていいのか、わたくしには分かりませんでした。

そこで、マリアを連れて、城下町で一番お年を召した、占い魔女さまの家を訪ねました。

魔女さまはおっしゃいました。

「この子は国を救う偉大な母になるだろう。小さいうちから厳しく育てて、善悪を身につけさせなさい。国民の心の支えになるだろう」

わたくしは、それを聞いてほっといたしました。そして、言いつけを守り、しっかり育てようと固く心に誓いました。

第2章：アニマル5年

<母の教え>

アニマル連合誕生から5年がたち、わたくし MARIA は5歳になりました。

一番の楽しみは、お母さまの膝の上に座り、英雄の絵本を読んでもらうことです。

「わたくしも、アモス王のような立派な犬人間になりたいですわ」

そう言うと、お母さまはとても嬉しそうに微笑みます。その笑顔を見ているとわたくしも嬉しくなりました。

わたくしはお母さまに訪ねました。

「猫人間たちは悪い人たちなのですか？」

「違います。悪い人もいましたが、わたくしたちと同じ人間。神さまに祝福された仲間ですわ」

そう言ってお母さまは絵本を閉じました。

わたくしとお母さまは、絵本のあとは仲良く手をつないで、教会に通うことが毎日の習慣でした。

家の隣の教会では、クック神父さまが素晴らしい説教を語られています。わたくしは、深く深くうなずくのでした。

ふとお母さまの方を見ると、満足げにわたくしを見守っています。わたくしはよいことをしているのだと感じました。

最後にみんなで神さまに祈りを捧げると、お母さまと手をつないで教会を出ました。

すると少し年上の男の子たちが、太い木の棒を振り回して、英雄ごっこをしておりました。わたくしも、お母さまも、ほほえましく見ておりました。

しかし、男の子の一人が、棒を大きく振り回し過ぎて、転んでしまいました。

わたくしは、かわいらしく思って思わず声を立てて笑ってしまいました。男の子も笑ってくれると思っていました。

ところが、男の子は怖い顔をして近づいてきました。そして、わたくしを棒で叩きはじめました。

「痛いです。やめてください！」

「なんだ。気持ちの悪い目をして。悪魔の子め！」

ほとんど家族としか接しないわたくしは、自分の目が変わっていることを忘れていました。

しかし、知らない人から見れば気持ち悪いことを知って、恥ずかしく思いました。

どうしたらいいの。どうしたらやめてくれるの。

わたくしは、お母さまが助けてくれるに違いないと期待しました。実際、お母さまは棒を手でつかみ、止めに入ってくださいました。しかし、信じられないことを言うのです。

「笑った MARIA が悪い。謝りなさい」

痛い思いをしたのはわたくしなのに、なぜ謝らなければならないのか。納得がいきませんでした。わたくしは首を横に振りました。

「誰だって失敗を笑われれば恥ずかしいものです。先に悪いことをしたのはマリアなのだから、マリアから謝るべきです」

お母さまの判断を聞いたわたくしは、なぜ叱られたのか理解しました。そして素直に謝ることができました。

これからは面白くても笑わない。

そう決心したのです。

そんなことがあった後、わたくしはお母さまと買い物に出掛けました。

買い物を終えると、お店の人がわたくしにお菓子を差し出しました。しかし、わたくしはそのお菓子が嫌いでした。

「いりません」

そうやって手を後ろに隠しました。そんなわたくしにお母さまが耳打ちして叱りました。

「お父さまのおかげで、マリアは裕福な暮らしをしているから分からないだろうけど、お菓子どころか、ライ麦パンさえ食べられない人たちがいるのです。それなのに、その態度はなんですか。どうしてニッコリ笑って"ありがとう"と言えないのですか。親切を仇で返すのは悪いことです」

お母さまの説明を理解したわたくしは、自分が悪かったと反省しました。しかし、どうしてもうまく笑うことができません。ぎこちない笑顔を見せて、そっと両手を差し出しました。そして、苦手なお菓子を、我慢して食べました。

これからは出されたものはすべて受け入れよう。

そう心に誓いました。

家に帰ると、お父さまがお酒の匂いをさせながら、まだ寝ています。

わたくしは、お父さまを指さして言いました。

「教会に行かないなんて悪いことだと思う」

するとお母さまが、わたくしの手を叩いて言いました。

「お父さまにはお父さまの考えがあるのです。食べさせてもらっている子どものあなたが批判すべきではありません」

わたくしは事情が分からないまま意見を言っただけでいいことを学びました。

お世話になっているものが、意見を言っただけでいいことも学びました。

これからは事情が分かるまで自分の意見は言わないでおこう。

そして早く親から自立したい。

そう強く願ったのです。

<ルーカスの叫び>

僕の名前はルーカス。1歳の時、父と母を亡くして、今は6歳になったんだ。

今日は、気づいた時にはそばにいて、毎日ガミガミ口うるさく指導するコーエン先生と、大嫌いなボードゲームをしないといけない。

「この条件で最善の行動は、これです。最低限ここはおさえておきたいですね」

机の上のコマを動かしながら、コーエン先生は続けざまにしゃべっていた。だけど、僕にはさっぱり意味が分からなかった。

なぜそうしなければならないのか、そもそもコマを使って戦いを想像することに何の意味があるのか、全然実感することができなかった。

「僕には分からないよ」

僕は叫んでみた。しかし、やはりコーエン先生は許してくれなかった。

「誰より強い兄王アモスさまを父に持ち、誰より賢い弟王クリスさまを叔父に持つルーカスさまが、立派な犬人間にならないはずがありません。さあもう一度！」

僕は泣きたくなった。しかし、泣いても許してもらえないことは分かっていたんだ。

意味が分からないまま、ただ言うなりにコマを動かし続けた。時間が止まってしまったかのように、永遠に続く苦痛に耐えるため、僕はギュッと膝をつねった。その痛みは、僕に夢じゃないことを教えてくれて、もっと深く絶望してしまった。

ここから逃げ出したい。

僕はコーエン先生の話の右から左に聞き流し、逃げ出す方法を一生懸命考えた。

「聞いているのですか！」

コーエン先生が怒り出した時、ノックの音が響いた。そして、賢者のイアンさまが現れたんだ。

イアンさまは、温かい感じのする紫がかかった茶色のカールした毛に、神秘的な銀色の目を持っていた。耳はピンッと立っていて、優美な尻尾は静かに垂れたままだった。服はいつも同じで、猫人間たちが着るフワフワした長い綿のローブの上に、犬人間たちが着るタータンチェックのコートを羽織っていた。

僕はイアンさまが大好きだった。

もしかして、賢いイアンさまなら意味を教えてくれるかもしれない。あるいは、分からないことを分かってくれて、"やめてもいいんじゃない"と言ってくれるかもしれない。

期待のまなざしでイアンさまを眺め、そして質問した。

「やあ、ルーカス。大変そうだね」

「忙しいのに来てくれたんだ。嬉しいよ」

「それは寄った甲斐があったねえ」

「ねえイアンさま、どうして勉強しなくちゃならないの？」

「そうだねえ。ルーカスは、クリス王のあとを継いで次の王になる子だからねえ。国民を守らなければならない。戦うべき時だってあるんだ。まあ、分からなくてもとりあえずやるしかないよ」

「でも、本当に分からないだ。そうだ、イアンさまが教えてくれたら分かるかも。ねえ、ここにいてよ」

「ごめんねえ。行かなくちゃいけないんだ。しばらく会えなくなるけど、がんばるんだよ〜」

「いやだよ、待って、イアンさま！」

僕はイアンさまのふわふわしたローブを思わずつかんでしまった。するとコーエン先生が僕の腕をつかんだ。

「聞き分けのないことを言ってはいけません。イアンさまはお忙しい方なんです。ルーカスさまをお教えするのはわたしの役目です！」

「戻ったらまた会いにくるから」

そういうとイアンさまはするりと僕の手から抜け出し、部屋から出て行ってしまった。僕は涙が出るのを必死にこらえた。

必ず逃げ出してやる。

そう心に強く願った。

<マリアの苦悩>

お母さまに叱られてばかりいるわたくしは、悲しかった。辛くて、涙がポロポロこぼれました。

神さまに助けを求めるため、お母さまには内緒で、こっそりクック神父さまのところへ参りました。

クック神父さまは、快く迎えてくださいました。そして、懺悔室へ連れて行ってくれました。

小部屋に入ったわたくしは、隣で耳を傾けてくださるクック神父さまに小さな声で悩みを打ち明けました。

「わたくしはお母さまに叱られてばかりいます。どうしたら叱られないよい子になれるでしょうか？」

「わたしが知る限り、マリアはとてもよい子ですよ」

「でもお母さまはそうは思っていない」

「いやいや、マリアのお母さんもきっといい子だと思っているはずですよ。たぶん、心配しすぎているだけだと思いますよ」

「痛い思いをするのも、嫌な思いをするのも、悪いことをしてしまうのも嫌なんです。どうしたら叱られなくなりますか？」

「分からないときは、神さまの真似をしてみるといい。この教会で聞いたことをよく覚えておきなさい。そのうち叱られなくなるから」

「本当ですか？」

「マリアは神さまを信じていないのですか？」

「いいえ、信じております」

「信じるものは救われる。だから安心なさい」

「はい、クック神父さま」

「そうだ、いいものをあげましょう。こちらへおいで」

わたくしは急いで小部屋から出て、クック神父さまの前に立ちました。

「手を出してごらん」

両手を合わせてそっと差し出すと、クック神父さまがポケットから何か取り出して、手のひら

にそっと置いてくださいました。

わたくしは、顔を近づけてじーっと見ました。それは、とても小さなガラスの靴でした。右と左がちやんと揃っていて、キラキラと輝いています。

「これは古い魔女さまにもらった特別なお守りです。神さまにお願いしたいことができたなら、この靴にお祈りしなさい。きっと叶えてくれるでしょう。一度離れた靴が再び二つ揃うと幸運を運んでくれるという言い伝えがあるくらいだから」

「ありがとうございます。大切にしますわ」

やっと安心できたわたくしは、自然と顔がほころびました。

<出会い>

ガラスの靴を握り締めたわたくしが、教会の扉を開けて外に出ると、同じくらいの年の男の子が走ってきました。

見守っていると、真っ黒いサラサラした肩までの髪を風になびかせて、だんだん近づいてきました。緑色の垂れた目は、優しく、どこか寂しそうで、悲しげですらありました。幼さの中に美しさをのぞかせ、人を振り向かせるような魔力を感じさせる顔立ちでした。

わたくしは扉の前から離れて、男の子を入れてあげようと思いました。

しかし、間に合わず、わたくしたちはぶつかってしまいました。

「痛い！」

わたくしは思わず叫びました。

「僕だって痛い！」

男の子は泣き出しました。

「大丈夫？」

男の子を眺めましたが、けがをしている様子はありません。しかし、全然泣きやみません。いくら待っても、ますます大きな声で大粒の涙をこぼして泣くのです。

わたくしは、お母さまの教えを忘れて、思わず思ったことを口に出してしまいました。

「転んだくらいでこんなに泣くなんて、あなたって弱虫なのね」

突然、男の子は泣きやみました。そして、ニッコリ微笑みました。

悪口を言ってしまったことに気づいたわたくしは慌てました。また叩かれるかもしれない。逃げなければ。そっと後ずさりしました。

すると男の子がわたくしの手をつかみました。クック神父さまからもらったガラスの靴が落ちて散らばりました。

わたくしは、素早く左の靴を拾い上げました。

「落としたりよ」

男の子は右の靴を拾うとわたくしに差し出してきました。しかし、叩かれる恐怖と、悪いことをした後悔でいっぱいだったわたくしは、男の子に近づくことができませんでした。

すると男の子が顔を近づけてきました。

「君の目って赤と金なんだね」

人と違うこの目が嫌いなわたくしは、恥ずかしくて思わず男の子を突き飛ばしてしまいました。教会に背を向け、家に向かって走り出しました。

「待って！」

振り返ると尻もちをついたまま、男の子が必至に手を伸ばしていました。けれどもわたくしはただ怖くて逃げ出してしまいました。

* * *

僕は、拾ったガラスの靴を握り締めて、女の子のあとを追いかけてしようとしたんだ。

しかし、打ち付けたお尻が痛くて、すぐに立つことができなかった。

女の子は、腰まで届く細かいカールのかかった純白の髪をなびかせて、どんどん遠ざかってしまった。

痛みが引くのを待ちながら、僕は必死に女の子の顔を思い返した。

赤と金の目以外は、特別目立つところはなく、大人しい顔立ちをしていたように思えた。

僕を弱いと認めてくれた初めての相手が同じくらいの年の女の子であるのが嬉しくて、友だちになりたいと思った。

でも教会から神父がでてきて、僕が王子であることに気づいてしまった。

「お城を抜け出してきたのですか。みんなが心配しています。わたしが送りますから、一緒に帰りましょう」

「嫌だよ。帰りたくないよ」

僕は神父に背を向け、ガラスの靴を眺めた。すると神父が後ろから覗き込み、知りたかったことを教えてくれた。

「それは MARIA にあげたガラスの靴ではありませんか。どうしてルーカス王子がお持ちになっているのですか？」

「あの女の子は MARIA という名前なんだ。もっと MARIA のことが知りたいなあ」

「お城に帰るなら教えて差し上げます」

追いかけてくてももう MARIA がどこへ行ったのかわからない。

「わかった。帰るよ」

僕は、MARIA のことをもっと知るために、大っ嫌いなお城に戻ることにした。

<悪い予感>

大賢者ランバート・ラブキンのあとを継いだ俺は、ドクトール王国とニニーム共和国を放浪して情報を集めては、クリス王に報告する仕事を任されていた。

ドクトール王国の主食はライ麦で、パンにして食べる。特産品は、緩やかな山並みで育てられた羊の毛で作った毛織物と、材料の綿花をニニーム共和国から輸入して作る綿織物で、世界中に輸出されて富を生み出していた。

対して、ニニーム共和国の主食は長期保存のきかないバナナだ。特産品は、カカオや綿花など農作物で、一部の領主以外は貧しい暮らしを強いられていた。

しかし、ドクトール王国には、ニニーム共和国の農民よりさらに貧しい人たちがいた。戦争が終わり再開されたバナナの輸入で、ライ麦パンの需要が減り、収入が激減したライ麦生産者たちだ。

ドクトール王国も、ニニーム共和国も、農作物を育てて売ったり、工業製品を作って売ったり、自由な商売を保証している。

どちらの国でも、たくさん儲けた者からたくさん税金を取り、少ないものからは少しだけ取った。働けないものを保護する仕組みもあった。

貧しいニニーム共和国に比べて、豊かなドクトール王国は、より手厚い保護が与えられた。しかし、仕事を持っているライ麦生産者は保護の対象とはならず、保護を受けているものより貧しい暮らしを強いられていた。

現地を歩き回って、その怒りがニニーム共和国の領主に向けられていると感じた俺は、フィッシュ諸島で2番目に大きな島、シャーク島へ急いだ。

なぜなら、攻撃魔法の天才的家系で、ニニーム共和国一のバナナとカカオの大農場を持つサドラー家があるからだ。

以前なら、離れた場所にあるため、攻撃の対象になる心配はなかった。

しかし、アニマル連合ができたことで、魔技を扱う魔技師たちが、転送魔法の研究をする機会を得て、ついに誰もが持っているわずかな魔力で転送可能になった。

大人が一人通られるくらいの枠で、入口用と出口用がある。飛び込むと、体が全て入った瞬間、出口に転送される。

入る側は、前の人とぶつからないように、5秒数えてから入るのが暗黙の了解になっている。

出る側は、次の人とぶつからないようにできるだけ転送装置から離れる。

たったそれだけで、遠い場所へ一瞬で飛べてしまう。

大量に輸送するのは難しいが、連絡を取るために、主要な場所はつながれていて、誰でも無料で利用することができる。

近距離であっても、中心部から出入り口への一方通行の移動手段として使われることがある。ラビット城では、城門に入り口、城下町の入り口脇に出口を設置して、緊急時に対処できるようにしている。

安価に大量に流通していて、分解して好きな場所に設置することができるため、問題視もされている。しかし、一度手に入れた便利さを手放すことはできないため、なんとなく受け入れられている。

悪用しようと思えば簡単にできる。

嫌な予感がする。

俺は先を急いだ。

<サリーの夢>

あたしの名前はサリー・サドラー。今年18歳になる。チャコールグレイの背中まで届く髪と賢そうに見える青緑色の目が自慢だ。細身でどちらかといえば美人だと思う。

竹とヤシの葉で作られた家が一般的なシャーク島では珍しい、板張りの2階建の家に住んでいる。敷地内には、積み上げられた石で造られた倉庫がいくつも建っていて、収穫されたバナナやカカオがたくさんしまわれている。

夢は、回復魔法と攻撃魔法を操る賢者の称号を得ること。

幼いころから攻撃魔法の天才児と呼ばれて、すでに完璧に眠りの魔法を使いこなすあたしにとって、問題は回復魔法の習得にあった。

攻撃魔法の天才的家系のためか、回復魔法を使える猫人間が身近にいない。

ニニーム共和国一の財力を誇るため、サドラー家の図書室には回復魔法を教える本だけはたくさんある。あったけど、恐ろしく難しく、さっぱり分からなかった。

ベッドの上は、開いたままの本が広がっていて、寝る場所がない。仕方なく、お昼寝用のハンモックに見つけたばかりの新しい本を持ち込んだ。棚を見ると、シャーク島名産の木彫りの人形が、あたしがつけてあげた色とりどりのリボンを誇るように自信満々な様子で並んでいる。

あたしは、本を開いて指で文字を追いながら、丁寧に読み進めていった。

しかし、気づくと爆睡しており、貴重な読書時間が失われていた。

そして、無遠慮な母の大声で起こされるのだった。

「サリー！」

あたしは、ビクツとした拍子に、ハンモックから落ちて床に叩きつけられた。

「もっと起こし方ってものがあるでしょう！」

「いい加減、起こされないでも起きてきなさいよ。遅刻するわよ」

あたしの苦労なんてちっとも理解しない母は、能天気にならぬ鼻歌を歌いながら去っていった。

一人になったあたしは、思わず叫んだ。

「みんな眠らせてしまいたい。そうすればもっと時間を自由に使えるのに！」

学校用の鞆に読みかけの本を詰めて、食堂に急いだ。

テーブルには、たっぷりチョコレートをかいたバナナが盛られていた。

あたしは、チョコレートだけを指ですくってなめた。

「ちゃんとバナナも食べなくちゃだめよ！」

母に無理矢理渡されたフォークでバナナを突き刺し、無言で流し込んだ。

「そういえば、シャーク島に賢者さまがお越しになるのよ～」

「ふーん、賢者ねえ」

「以前学校にいらしたんだけど、サリーは風邪で休んでいたからあったことはないでしょう。会
うのが楽しみね」

「べつに～、じゃあいくから」

「あ、もういっちゃんの？」

教室に入ると、同級生たちがあたしから遠ざかった。そうして、愛想笑いを浮かべるのだった
。

あたしは、その態度にイラつくと同時に、仕方がないとも思った。みんなサドラー家の使用人の
子どもだからだ。あたしのことは嫌いだが、それを態度にもだせない。そんなところだった。

以前、あたしに近づいてくる子もいたにはいた。けれど、その子の目当てはあたしではなく、
腹いっぱいバナナを食べることにあると分かって、自分から離れていった。

一人はさびしい。だが、物を与えてまで人といたいとは思わない。

あたしは、授業が終わるたびに、本を取り出して夢中で読んだ。そして授業が始まっても気づ
かず、読み続けてしまった。しかし、先生は何も言わなかった。

状況に気づいたあたしは、自主的にそっと本を閉じた。すると疲れがどっとでて睡魔に襲わ
れた。気がつくときすべての授業が終わっていた。

* * *

学校から戻ったあたしは、ハンモックに寝転んで、今日読んだ内容を思い返していた。

何がいけないのだろう？

何につまづいているのだろう？

悩んでいたところへ父が突然入ってきた。

「あたしの部屋には入らないでっていったでしょ！」

「心配がおかしい。異物があるようだ。サリーも捜索しなさい。ただし、何かみつけても触らず
にわたしを呼びなさい！」

ただならぬ父の様子に、逆らうことを諦め、敷地内を歩き回った。

するとバナナ倉庫の影に、見たことのない小さな箱があった。バナナ半分ほどの大きさで、闇
にまぎれるように黒く塗られていた。

あたしは魔法で火花を散らして父に報せた。

父は、集まった人々が見守る中で、突然叫んだ。

「みんな逃げなさい！ わたしから離れるんだ！」

右手で箱をつかむと、父がバリアを張った。

するとバリアの中で大爆発が起きた。

「ぐうおおおお！」

父の叫び声とともにバリアがとけて、黒い煙がもうもうと上がった。

「あなた！」

母が父を探して叫んでいる。

父の姿は？

いた。地面に倒れている。

家族が駆け寄った。使用人たちは遠巻きに見守っている。

父は体中から血を流していた。そして、箱を握っていた右腕がなくなっていた。

しばらくすると医療の心得のある猫人間がやってきて、父の手当を始めた。しかし、思ったより傷が深く回復は絶望的なようだ。

父は、もう二度と魔術が使えない体になってしまった。

あたしはなにもできなかった。

せっかく実力を試せるチャンスだったのに、逃してしまった。

急がなければ、次のチャンスも逃してしまう。

強くそう思った。

翌日、いつも通り学校にいったあたしは焦っていた。

体育の授業なんてやっている場合じゃない。そう思った。

だから、悪いことだとしりつつみんなに眠りの魔法をかけて本を読むことにした。

* * *

俺はドラ猫のあだ名を持つ学校一強い男だ。

勉強が苦手な俺が、唯一活躍できる大好きな体育の時間が始まり、俺は嬉しかった。

ところが、気がつくやうに授業は半分終わっていた。

あたりをみると、みんなも先生も意識を失っていたらしい。

一人が、日影のベンチを指さした。するとそこには憎たらしいサリーが夢中で本を読んでいた。

俺たちは、サリーに眠らされたことを悟った。しかし、領主の娘なので、先生ですら文句が言えなかった。

このまま泣き寝入りするしかないのか？

サリーは、いつもすまして俺たちとは口を聞かなかった。常々一度へこましてやりたいと思っていた。

サドラー家に逆らって、親に叱られることは怖くなかった。怖いのは、サリーが使う攻撃魔法だ。魔法の使えない俺が、正面から向かえば返り討ちに遭ってしまうだろう。他の子どものように力だけで勝てる相手ではなかった。

だが、今度という今度は堪忍できない。勝手に眠らせて俺の大切な時間を奪ったのだ。報復しなければ、ここで止めなければ、俺たちに未来はない。

みんなは怖がって手を出さないだろう。俺一人でやるしかないのだ。

一人残らず帰るまでサリーが本に夢中になっていたらチャンスはある。離れた場所から攻撃すれば、勝てるかもしれない。

俺は手ごろな大きさの石を1つずつ集めていった。

* * *

あたしは、日が落ちて本が読みにくくなるまで、回復魔法習得に夢中であたりの様子に気づかなかった。

ふと顔をあげると、ドラ猫の異名を持つ男の子が石を握ってあたしを狙っていた。

不意打ちを食らって、無数の石に打たれたあたしは、血を流して苦しんだ。

「やめて！」

怒りを込めて声をあげた。

しかし、ドラ猫は手を止めようとしなかった。

あたしは、救いを求めて思わず悲鳴をあげた。

「やだっ、だれか！！」

すると紫がかった茶色の毛を持つ猫人間が現れて、あたしの前に立ち、代わりに石を受けてくれた。

「もうやめるんだ。次に投げたら俺が相手になる！」

立ちほだかった猫人間の顔を見たドラ猫は、驚いた様子で黙って逃げていった。

あたしは、ズキズキする体を抱えて、背を向けた。

「ご親切にどうも。どちらさまですか？」

「とりあえず手当がさきかな」

そういうと強引に傷に両手を当て、不思議な力であたしのケガを治してしまった。

いくら本を読んでも分からなかった回復魔法を初めて目にして、心から感動した。

「すごい・・・」

つぶやいてしまったことが恥ずかしくて、あたしは泣きそうになった。

泣き顔を見られたくなかったあたしは、黙って家に走り出した。

* * *

家に帰ると、帰りが遅いことを心配した母が、玄関先で待っていた。

血だらけのあたしを見て、驚いていた。

「何があったの？」

「もう痛くない。お風呂にはいりたい。そこをどいて！」

シャワーで血を洗い流したあたしは、鏡に自分の裸を映した。

見事に傷は癒えていた。

「なんか、悔しい」

緊張の糸が切れて、あたしの目から一筋の涙が頬を伝った。

涙をぬぐって居間に戻ると、さっきの猫人間が座って紅茶を飲んでいた。

治療中でベッドから起きられない父に代わって、母が対応していた。

あたしを見つけると猫人間を紹介し始めた。

「サリー、こちらが賢者のイアン・ブーンさまよ。ご挨拶してね」

「あっそうなの。あなたが賢者だったの？」

「これでも結構有名なんだけど、知らなかったのかぁ」

「だって全然賢者に見えないもの。もっと厳格な人かと思っていたわ」

そう言いながら、あたしはイアンさまの隣に座った。

するとイアンさまがあたしをじーっと見つめた。

あたしは、何を言われるのか期待と不安で心が揺れた。

「君、勉強熱心なのはいいけど、もうちょっと周りのことを見た方がいいよ！」

「！」

がっかりすると同時に、母にまた非難されることを恐れたあたしは勢いよく立ち上がった。

「サリー、あなたまた本を読んでいたのね！」

「うるさいわね！」

急いで自分の部屋に逃げ込むと、魔法を使って居間の声に耳をすませました。

母がイアンさまに謝る声が聞こえてきた。

「すいません。わがままな娘で」

「いえいえ、ああいうの俺は気にしませんよ。ちょっと話をしてくようかな」

あたしは思わず散らばった本を床に落としながら、布団に頭を隠した。

体中が心臓になったかのように、ドクドクという音が耳に響いた。

しばらくすると扉が開き、イアンさまが入ってきた。

「意外とかわいいかんじの部屋だねえ」

「意外は余計よ！」

顔を出して言い返してしまった手前、あたしは布団から出ざるをえなくなった。

「君、そんなに勉強が好きなら、俺についてこない〜？」

「え！？」

「まあ、今すぐじゃなくてもいいけど、考えておいてよ」

そういうとイアンさまはすぐに部屋を出て行ってしまった。

「どうする、どうする・・・」

あたしは意味もなく部屋を歩き回った。

* * *

サリーと別れたあと俺は、ベッドで治療を受けるサドラー氏と会うことができた。

俺の回復魔法でも、失った右腕を再生することはできない。

俺は治療を諦め謝罪した。

「イアンさまは精一杯尽くしてくれた。このご恩は忘れません！」

俺はサドラー家が用意してくれた部屋に下がった。

翌朝、俺はサリーが来るのを待った。

立ち去ろうとしたその時、俺は驚いた。なぜなら、背中まで届く長い髪が、肩までバツサリと切られていたからだ。

俺にじーっと見つめられて、サリーはほんのり頬を染めた。

「あれ、髪、切ったんだねえ」

「髪が長かったら旅の邪魔になるでしょう！！」

俺は歩き出した。後ろをサリーがぴったりとついてきた。

<お祭り>

13歳になったわたくしは、お父さまと一緒にお祭りにでかけました。忙しくてめったに話をしないため、どう接してよいのか戸惑いました。しかしお父さまの嬉しそうな顔を見て、少しだけ安心しました。

最初に向かったのはサーカスです。

空中ブランコや綱渡りなど、素晴らしい芸に感動して精一杯の拍手を送りました。

ところが、ピエロがでてきて、ハラハラするような失敗ばかり繰り返します。わたくしはどうしていいのかわからなくなりました。

ふと見るとお父さまは大声でゲラゲラ笑っています。周りの観客たちも大爆笑です。

しかし、舞台の上のピエロは困った様子でおろおろしています。

わたくしは胸が痛くなって、どうしても笑うことができません。

「マリア、どうかしたのか？ おもしろいだろう？」

お父さまを失望させてはならない。そう思ったわたくしは、静かに微笑みました。

サーカスの帰り道に、露店が並ぶ通りをお父さまと二人で歩きました。

すると変なおいが漂ってきました。

「ドリアンか。珍しいな。マリアは食べたことがないだろう。たべさせてあげよう」

わたくしはそんなくさいものを食べたくありませんでした。しかし、お父さまの好意を断るわけにはいきません。思い切って口の中に入れました。

味は、そんなにひどいものではありませんでした。けれど、鼻から抜ける匂いが強烈で今にも倒れそうです。

「どうだマリア、おいしいだろう？」

「はい、お父さま」

お店の人が出てきて、わたくしを見て驚いたように言いました。

「この国の人間で、ドリアンが好きとは珍しい。お嬢ちゃん変わっているなあ」

「わたしも嫌がって吐き出すかと思っていたよ」

そういうとお父さまはワハハと豪快に笑われました。

わたくしは食べた方がよかったのでしょうか。食べなくてもよかったのでしょうか。

手にドリアンの汁がついてしまったので、お父さまが洗ってくるように言いました。

わたくしは公衆便所を探しました。するとすぐに見つけることができました。しかし、お祭りのため大行列です。

最後尾を探すと、わたくしは黙って並びました。

するとおばさまがいらっしゃって、行列を無視して建物の中に入ろうとします。わたくしはとめた方がよいのか迷いました。しかし、子どものわたくしが、大人に意見を言うのはためらわれます。何か事情があるのかもしれない。

「ちょっと並びなさいよ！」

「手を洗いに来ただけだよ」

「ああ、そう。どうぞ」

わたくしは心から止めなくてよかったと思いました。同時に、わたくしも並んでいる必要はないのかもしれないと思いました。けれども、列を離れる勇気はありませんでした。

-

お父さまのところへ戻ると、イライラした様子で待っていました。

「手を洗うくらいでどうしてこんなに時間がかかったんだ？」

「行列ができていましたの」

「便所を使うわけじゃないのだから、入れてもらえばよかったのに。気転のきかない子だ」

「ごめんなさい」

速足で歩きだしたお父さまの後ろを、わたくしはトボトボとついて歩きました。

<マリアの夢>

18歳になったわたくしは、食事のあとの娯楽の時間に、両親の前で讃美歌を歌うことが日課となっていました。教会の聖歌隊のようにはうまく歌えませんが、家族は楽しんでくれているようでした。

歌い終わると、いつもわたくしの将来の話になるのです。

「わたくしは、一日も早く教会に入って、神のしもべとして暮らしたいと願っています」

するといつもは自信に満ちたお母さまが、迷った様子で答えるのです。

「マリアなら立派に勤まることでしょう。しかし、教会に入るためには、世俗を捨てなければなりません。もう少しわたくしの娘のままでいてもらえないかしら」

「そうぞマリア。わたしたちは、お前が可愛くて仕方ないんだ。お前の気持ちはわかるけれど、わたしたちの寂しい思いも分かっておくれ。悪いようにはしないから」

両親にそう言われると、周囲の意志を押しつけてまで教会に入るのも違う気がして、ためられるのでした。

神さまの真似をして、お母さまの言いつけを守れるようになったわたくしは、もう怒られることはありませんでした。お母さまのお手伝いをして、むしろ感謝されていました。

わたくしは心から満ち足りていました。

しかし、なぜかふっと一人になると苦しくなるのです。そして、片方だけ残された左のガラスの靴を取り出して、願い事をするのです。

「幸せなはずなのに、どうしてこんなに苦しいのでしょうか。わたくしはわがままなのでしょうか。どうか一日も早く心静かに暮らせるようになさってください」

祈り終わると、あの時出会った男の子は今頃どうしているのだろうと思うのでした。また泣いていないか気になります。しかし、どこの誰なのか分からないので、わたくしにはどうすることもできません。"ごめんなさい"と言いそこなったことが心残りなわたくしは、今度会えたら叩かれてもちゃんと謝ることを決意していました。

<ルーカスの願い>

19歳になった僕は、お酒におぼれていた。

酔いがさめて正気に戻ると、荒れ果てた部屋で、右のガラスの靴に語りかけた。

「マリア、僕は君の言うとおりに弱い。でも誰も弱い僕を認めてくれない。父や叔父のように強い人間になると期待している。僕はどうすればいい？ どうして王子なんかに生まれてしまったんだろう・・・」

僕は溢れ出す涙を止めることができなかった。

どれくらい時間がたっただろう。涙も枯れ果てたその時、僕は窓の外を眺めた。城門が目に入った。

するとイアンさまが現れた。ものすごく久しぶりで僕は嬉しくなった。

少し後を、見たことのない猫人間の女がついてくる。

クリス王に会いに来たのだろうか。こんな僕のことを話しあうのかもしれない。すごく嫌だなと思った。

* * *

俺とサリーがラビット城につくと、クリス王が迎えてくれた。

クリス王が俺に言った。

「イアン、今度の旅はどうだった？」

「ドクトール王国でも、ニニーム共和国でも、農村部は貧困に苦しんでいます」

「ライフ国際連盟に加入するためには、貧富の格差を解消しなければならないだろうな」

「はい、しかし商人たちにこれ以上の支援の要求は難しいと思います。特にアニマル連合の仲間とはいえ、他国であるニニーム共和国の農民を助けることには反対するでしょう」

俺とクリス王は黙り込んでしまった。

サリーは俺の後ろに隠れている。様子をうかがっているのだろう。

再び顔を上げたクリス王が言った。

「そちらの女性はだれだね？」

「ああ、わたしの妻です」

「えっ!？」

サリーは初めて妻と紹介したことに驚いたのか、俺の横に並んだ。

「わたしたちのことより、心配なのはルーカスです。どうしているんですかねえ」

「相変わらず、部屋に籠って酒浸りの日々だ」

ルーカスの話が出ると、サリーはクリス王の前で初めて口を開いた。

「ああ噂は聞いています。彼色々こじらせちゃったんですねえ」

「サリーはどうしたらいいと思う？」

俺はいつもの調子でサリーに意見を求めた。

「そんなの決まっているわ」

腰に手を当て、胸を張り答えるサリー。

「わたしのような妻を迎えることよ」

少しの沈黙ののち、俺はほほえみながら、クリス王は苦笑しながら同意した。

* * *

今日もコーエン先生が、扉の前に居座っていた。

僕は、連日の深酒でクラクラする頭に響くその声が少しでも聞こえないように耳をつかみながら、あきらめて去っていくのをじっと待った。

こんな姿をマリアが見たらどう思うだろう。

嫌いになるだろうか。

真実を知ることは怖くてたまらなかった。

でもマリアなら許してくれるかもしれない。

もう一度会いたい。

それ以外は何にもいない。

心からそう願った。

すると突然扉が開いた。立っていたのはイアンさまだった。

「やあ、ルーカス。鍵を壊して申し訳ないねえ」

「イアンさま！」

僕は思わずイアンさまに抱きついて泣き出してしまった。

イアンさまは、僕が泣き止むのを見守ってくれた。

「一人でさびしい思いをしているんだねえ。どうだろう、ルーカスも年頃になったことだし、そろそろ結婚してもいいんじゃないかな」

僕はやっぱり僕のことを話しあっていたのかと嫌な気持ちになった。しかし、それがいきなり結婚であることに驚いてしまった。同時に、王子である僕が、庶民の娘であるマリアと結婚できないことを思い出してしまった。

「いやだよ～」

すると扉の影から突然クリス王が現れて僕に言ったんだ。よく見るとイアンさまときた猫人間の女もいる。

「ならばどうすればいい。どんな条件でもいいから言ってごらん」

僕は考えた。どうすればマリアを僕のものにできるだろう。

三人から注がれる痛いほどの視線の中で、僕は人生で一番真剣に言葉を探した。そうして、以前から夢見ていた出会いの情景を思い浮かべて言った。

「もし、城下町の娘たちを舞踏会に招待してくれたら、その中から相手を選んでもいいよ」

「しかし、立場の違う庶民の娘を妻に迎えれば、そのものは苦勞するだろう。貴族や豪商の中から選んではどうだね？」

クリス王は諭すように優しく言った。けれど僕は絶対に引かない覚悟を決めていた。人生を賭けた大勝負だった。

「どんな条件でもいいって言ったじゃないか。聞いてくれないなら、僕はもう王子をやめちゃうんだから！」

僕があまりに強く、激しく叫んだものだから、イアンさまもクリス王もびっくりしていた。僕自身、僕からこんな勇気が湧き上がるのが不思議でならなかった。

「分かった。いいだろう。ルーカスの好きにするといい」

クリス王はそういうと部屋を出ていった。イアンさまも後に続いた。猫人間の女もイアンさまについて去った。

僕は力が抜けて、床にペタンと座り込んでしまった。

でもとうとう言えた。夢に一步近づいた。

気力を取り戻した僕は、右のガラスの靴を探し出してつかむと、胸に抱き寄せ感謝の祈りを捧げた。